聞き書きによる「俊夫おじさん」の自分史

本稿は、筆者と同じ町内（南さつま市大浦町）に住む窪 俊夫さんに「これまでの人生の話を聞かせてください」と頼んで聞かせてもらった話を筆記したもので、生まれてから昭和 40 年くらいまでの自分史が語られている（末尾の補記も参照）。

東京へ出て、働きながら夜学で勉強

○ 自分は大正 12 年生まれで今 90 歳になる。

○ オヤジはタンコ職人だった。桶とかを作る人。鹿屋の方でタンコを作っていて、弟子も 2 人いたが、大正 7、8 年ごろに大浦に戻ってきた。桶屋はあまりいなかったようで、日銭は稼いでいた。

○ オヤジは日露戦争に行って、兵隊に入った時に字を覚えたと言うことだ。それでも読めるのはひらがなだけだった。字が読めないから兵役では荷物運びだったらしい。

○ 自分は大浦小学校尋常科（6 年）、高等科（3 年）を出た。その上の中学校に行ったのは一学級で 3 人くらいだった。自分も勉強がしたくてオヤジに中学校に行きたいと言ったが、「そんな金がどこにある」と怒られた。

○ そこで、宮園集落の橋口さんという人が、東京の本郷で書店をやっていてそこに寄せてもらうことになった。橋口さんは大浦の子どもたちの教育に手を貸したいということで毎年 3 人くらいを受け入れ、書店で働かせて夜学に通わせていた。全国から注文が来る本屋さんで、1 冊とか 2 冊とかの注文が入るのでそれを倉庫から運んできて梱包し、それを郵便局に持っていった。たくさんの注文があって、一日分の本が手車一杯あった。手車を押して郵便局に運んでいった。

○ 昭和第一商業学校というところを受験した。勉強は全然していなかったから、合格発表の日は自分で見に行くことができないくらいだった。橋口さんのところには先輩がいたから、代わりに合格発表を見に行ってもらったら受かっていて喜んだ。昼は書店で働いて、夜は学校で勉強した。学校は夕方 5 時から始まって、4 時間くらいあった。

○ 昭和 18 年、19 年、20 年と空襲がひどくなって、橋口さんは鹿児島に戻ってきた。終戦になったらまた東京へ帰ったがもう本屋はやらなかった。だから橋口さんの書店は今はない。

○ 当時、書店の月給が 5 円だった。4 円は学校に納め、学用品に 50 銭くらい使ったの

で小遣いは 50 銭くらいだった。その時は節約していて、あまり無駄遣いはしなかった。あまりほしいものもなかったように思う。

○ 大浦から橋口さんのところに行っていた人が 15，6 人いた。みんな若くて力を持てあましていたので作業場で相撲を取ったりして、畳が 1 ヶ月持たなかったという時もある。もちろん随分しかられた。橋口さんの生活指導はとても厳格で、厳しい人だった。

○ 学校は全国から勉強をしたいということで学生が来ていたので、優秀な人が多かった。自分は算数が得意だったが、他はよくなかった。特に英語は全然ダメだった。だが英語の先生が大分出身の先生だったのだけれど、同じ九州出身ということで目をかけてくれた。休日に教えてやろうと誘われたけど「これからは世界のどこに言っても日本語で通じる世の中になる」と言って断った。その頃は戦争に勝っていたからタカをくくっていたのだ。でも先生は「今の世界の共通語は英語だし、船で世界を見て回りたいなら英語は頑張らないといけない」といっていた。

○ だが、昭和 14 年に東京に来たのだが、その 2 年後には大東亜戦争が始まった。だから学校で真面目に勉強できたのは 1 年半くらいで、学校の授業も半分くらい軍事教練になってしまった。それで「何のため勉強に来たたろかい（来たのだろうか)」と思った。3 年目くらいで、「どのみち勉強したところで、国のために死んたっが（死んでしまうんだろう)」と思ったし、みんな同じ気持ちだったと思う。

○ 以前から世界を見て回りたいという気持ちがあって、船の通信士になりたいと思っていた。通信士ならいろいろなところを見て回れると思った。だが、戦争が激しくなって勉強もろくにできなくなったので、卒業を待たずに退学してしまった。

○ その頃、書店のような「平和的」な仕事をしている人は軍にどんどん徴用されていったので、仕事を変えようかという気持ちもあった。栃木に飛行学校があって、そこを友人と二人して橋口さんに黙って受験した。受験には保証人がいるから橋口さんのハンコを黙って押して願書を出した。そうしたら、自分は学科は出来たが近視のために落ちた。しかし友人は受かったので、黙って受験したのがばれて、2 時間説教をくらった。板間に座らされて、最後の方は「もう勘弁してくれ」という感じになった。今から考えると、ちゃんと「ここを受験したい」と言って予め相談すればダメとは言わなかっただろうに、当時はバカなことをしたものだ。

○ 世田谷の方に小窪デンスケといういとこがいて、働き口はいくらでもあるよと言われていた。頼めば東京での仕事を斡旋してくれたと思うが、橋口さんは「お前たちの親から命を預かっているわけだから、他の所に転じて何かあったら責任が持てない。東京駅まで送ってやるから鹿児島に帰れ」と言って、小窪さんに挨拶もできないまま

東京駅まで送られた。でも橋口さんのところを辞める時に 30 円もお金をもらった。積み立てておいてくれたものだった。

○ 帰路は、どうせ帰るなら各地を観光して行こうと思ってまず伊勢神宮に参拝した。その日のうちに京都に回って、明くる日に京都観光をする予定だったが、電車の切符のことで車掌と大喧嘩した。そのわけは、東京は環状線だから運賃が一律で乗り降りが自由だったが、京都は一駅一駅料金を取る。そのことを知らずに本来払うべきところで払っていなかったので、車掌から無賃乗車扱いされたのだった。それで頭にきて、観光はやめてどこにも行かずに真っ直ぐ鹿児島行きの列車に乗った。

木材会社で働いていたが、徴兵

○ 橋口さんからもらった30円のうち、親には10円を渡した。その頃の10円というと、今では 1 万円 2 万円ではきかない大金だ。家にいくらか居たけれど、戦争中で娯楽もなくつまらなく思っていたところ、姉が鹿児島にいて、その紹介で木材会社に入ることができた。といっても、兵隊に行くまでの 2 年くらいの間のことだ。

○ その木材会社も軍需をまかなっていて、鹿児島の山を回って木を買って、杉を切り、錦江湾で筏に組んで南洋まで引っ張っていった。南洋には、杉みたいな木がなかったのだと思う。

○ 自分は山を回って買い付けをする仕事をした。小さな山を買ったときは、会社には黙って地元の製材所に高く転売して儲け、芸者遊びをしていた。その頃、山は軍事のために押さえられていたから普通の製材所は山の木を買えなかった。だから転売したらとても喜んで、高い金で買ってくれたのだ。国分や曽於のあたりにいい木があった。

○ 昭和 19 年 3 月、召集が来て伊敷にあった 18 部隊の練兵所に入れられた。3 ヶ月間の軍事訓練を受けたが、叩かれない晩はなかった。

○ 例えば、夜に持ち物検査で制服が揃っているか上官が確認したが、制服が盗られてなかったことがあって殴られた。でも一度盗られると制服はみんな同じなので見分けがつかないから取り返すことは不可能だ。どうしたらいいかと上官に聞くと、「お前も誰かのを盗ればいい」というので「ナアンダ、盗ればいいのか」と思って人のものを盗った。そうなると一番気が利かない人が最終的な被害者になるが、自分の場合はどこそこから予備を盗っておいて、揃っていない人に確認の時にサッと差し出してあげたから随分助かった人もいた。

○ 時々、隊長の名前とか、軍の組織の名前とかをちゃんと覚えているか暗唱させられることもあった。みんな殴られるのが怖いから、怖じ気づいて覚えているのに言えなくて殴られるなんてこともあった。自分は暗記力が優れていて、そういう時にもちゃ

んと言えたが、言えない人は互いに殴り合わされるなんてむごいこともあった。自分は班長に気に入られていたお陰で、そういう確認の時にわざと班長のところに呼ばれて殴られないようにしてもらったこともある。でも後で「お前どこに行ってた？」と言われて結局殴られた。何をしても殴られるようになっていた。

○ 「こんなのは本当の教育じゃない、ただの叩っ比べじゃ」と思った。それで、こんなことをしていたら日本は負けると思った。そうして殴ってばかり居るから、当然上官は部下からの恨みを買った。だから配属になる最後の日は、気の利いた友人何人かと上官へ「お礼参り」しようとしたが、それを上官も分かっていて、その日になるともうどこにもいないのだった。

○ 配属は、自分は暗記力がいいということで、みんなとは違って暗号教育の方に進むことになった。部隊の本部のところで暗号に携わるので、死ぬのは隊長が死ぬ時になるということでみんなには羨ましがられたが、自分は戦友たちと一緒に配属されたかった。みんなの配属先は機密だからもちろん教えてくれなかったが、班長に聞きに言ったら渋ったけれども台湾だと教えてくれた。台湾は米も穫れるしバナナも穫れるし、いいところだと思ったので台湾に行きたくなって、班長に連れて行ってくれと頼んだけど当然融通が利くわけがない。でも折よく一人病気になった人が出た。それで欠員が出たから、また班長に頼んだら、そこに入れさせてもらうことができ台湾に行くことになった。

台湾での戦争体験

○ 台湾では、歩兵部隊の迫撃砲隊に配属され、観測兵になった。砲撃のため望遠鏡で高度や角度を観測する役目だ。海岸で砲撃の訓練をやっていて、地元住民の近くにわざと砲撃を落とすなんていう遊びをやったこともある。もちろん中隊長から怒られたけれども。

○ 自分にとっての兵隊の経験は、恵まれたものだったと思う。戦闘はなかったし、特殊兵だから厳しい訓練もなかった。

○ 昭和 19 年だと思うが、台湾にマッカーサーの艦隊が 50 数隻来たことがある。その時はまだ日本にも飛行機がたくさんあって、台湾に多くの飛行機がやってきた。でも、台湾の飛行場に着く直前で燃料が切れて海に墜落した飛行機もあった。可哀想なことだ。そして明くる日にはマッカーサーの艦隊に特攻していった。

○ 台湾では、大きな隧道を作って、その中に 300 人くらい歩兵の人たちと住んでいた。準備期間の間に拠点をつくり上げていたから、マッカーサーの艦隊も容易に攻略することができず、2 週間くらいで引き上げていった。それで艦隊は沖縄の方に行き、沖

縄では惨めな戦いになった。そこから終戦までは長くなかった。

○ 部下をいじめていた連中は、終戦後に元部下から殺された人がたくさんいた。自分は、脅しはしたが結局殴ったりはしなかった。

○ 台湾では、彼女がいた。観測兵だったから高いところから望遠鏡でいろいろなところを見るが、学校があって「あんなムゾか（可愛い）先生がおる！」とその人を見つけた。休みの日にそこに行って親しくなった。相手の親の所にも何度か行って気に入られていた。高隈出身の人だった。

○ そういう風に、兵隊に入っても横着（手抜き）だった。内地にいたら晩はどこにもいけなかったが、戦地では軍規はあまり厳しくなかった。というのも、実際の戦場では弾は前ばかりから来るとは限らない。上官は日頃恨みをもっている部下から（戦場のドサクサに紛れて）殺されてしまうということもあるわけだから、上下関係はさほど厳格ではなかった。それで割と自由がきいた。

○ 台湾で終戦を迎えて、蒋介石の軍の捕虜になった。日本の総督府がアメリカの爆撃で潰れて、その脇にあった建物に捕虜として収容された。中国の兵士が門番をしていて、もちろん自由に出ることはできなかったが、「公文書」という腕章を作って、「中隊長に命じられた」とか言って門番を騙して通してもらい、日本人のいるところに遊びに行って食べ物を調達していた。捕虜だから満足に食料を与えられていないから、食料を持ち帰るとみんなに感謝された。実はその時自分は随分お金をもっていて、それでそういうことができたのだった。

○ それにはこういうわけがある。捕虜になった時、蒋介石の軍から兵器・食料・衣料を供出しろという命令があった。そこで中隊長から命じられて、そういった物品を整理しろと言われたが、自分は「蒋介石に黙ってやるなんてバカバカしい」と思ったので、衣類は台湾の民家に隠させてもらった。それで、抜け出した時にその衣料品を売りさばいて、協力した民家の方にも売上の一部は渡して、それで儲けたのだった。軍服などはちゃんとした服だったし、その頃物がなかったから飛ぶように売れた。憲兵を騙してそのお金で遊びに行っていたわけだ。

○ 服を預けていた民家の人達は、とても正直で、預けた服を黙って盗ってしまうような人ではなかった。それは戦争中から信頼関係があったからだ。当時の台湾の民家は30人くらいが一つの丸い土壁に囲まれた家に住んでいた。30人もいるから、行けば誰か一人くらいは病気の人や怪我の人がいる。そこで、衛生兵に頼んで「腹が痛い」とか「怪我をした」と言えば薬がもらえたから、そうして薬をもらっておいて、民家に行ったときにそういう薬をあげるわけだ。その薬がよく効いて、民家の人達に感謝された。そうしていたらその民家に行くと、「ほら、窪さんが来たよ」といってみん

な歓迎してくれるようになった。それで信頼関係ができた。月に一回、そういう家ではニワトリを潰して一羽丸焼きにする行事があったのだが、その日にもわざわざ呼びに来てくれたくらいだった。

○ というわけで、銭を作って 3 ヶ月も遊んだ。でも、食料を調達してきても、上の人にはその秘密を教えなかったし、食料もあげなかった。「俺たちにもくれ」と言われたけれども、「わいどん（お前たち）は今までいい思いをしてきたんだからやらん」と言って渡さなかった。

○ こういうことはよほど度胸がないとできなかったと思う。門番を騙すのも堂々としていないと怪しまれる。

○ 捕虜は、日本軍が掘った防空壕を埋める作業をやらされたが、みんなろくすっぽ働かなかった。「中国人に負けたわけじゃない」という思いがあって、中国人が偉そうにするのに反発していた。それで全然言うことを聞かなかったし、向こうもこっちをあまり脅したりはしなかった。そんなわけで、言うことは聞かないし食料はいるしで中国人にとっても捕虜は早く日本に返した方がいいとなって、半年後に日本に帰還できることになった。別れの時には彼女が来て、「こっちにいて」と泣いて頼まれた。それで戦友には「そんな人がいたのか」笑われた。

大浦への帰郷

○ 船で鹿児島に到着したら、その日は上陸せずに船中で一夜を明かした。街の方を見ると、山形屋（※鹿児島で最も高級な百貨店）と高島屋のビルが見えた。「なんだ、街は大丈夫じゃないか」と思ったが、翌日上陸してみると鉄骨のビルが外側だけ残っているだけで後は全部潰れていた。昭和 21 年はまだ国防婦人会が残っていて、にぎりめしを作ってくれていた。そして、引き揚げ者たちは北の方へ列車で散っていた。

○ その頃は伊集院から南薩鉄道が通っていたので、南薩鉄道で加世田まで行って、バスで大浦に帰ろうとした。バスの本数も少なかったので、大勢の人がバス停で行列していたが、自分はそれに気づかずにバスが来たとき乗ろうとした。そしたらバス停の係員が列に並べと言って大喧嘩になった。国のために戦争に行ってきたのに、まるで兵隊のせいでひどいことになったみたいに扱われていたので腹も立っていた。係員の方が最後は「じゃあ乗れ」と言ったが、頭に来ていたので「いいや、並んでいた人の方が優先だ」とそれも断って、旅館に泊まって翌日帰ることにした。翌朝になって係員が旅館まで来て切符を持ってきたが、「歩いて帰る」と言ってまた断った。上津貫（かみつぬき）まで歩いてきて、このまま戻ったらロクなことがなさそうだと思い、暗くなるまで待ってから峠を越えて家に帰った。真っ暗だったが星明かりがあったの

で、別になんということはなかった。家に帰ったら「なんで何の連絡もしなかったのか」とオヤジに怒られたが、その時は連絡の手段もなかった。

○ それから戦中に働いていた木材会社でまた働き始めたが、オヤジが「帰ってこい、帰ってこい」というので、「貧乏をしに帰って来んないかんのか」とガックリきた。帰ってくる時は「これで俺の人生も終わり」と思った。だが、人生はやる気がありさえすれば苦労はするが面白い。ここから本当の「自分の人生」が始まったと思う。

○ 大浦に戻ってくるとまず小組合長をさせられた。小組合長は協同組合（農協）の仕事のとりまとめをする役目で、毎月「小組合長会」があり、いろいろなところを走り回らないといけないので、車もない時代だったから若者が務めるものだった。協同組合はそれまでもあったが、あまり実質的な仕事をしていなかった。それが、この頃にだんだんとちゃんとした組織になってきた。

○ 小組合長の時、集落の共有林の木を売った。戦後、どこもかしこも焼け野原になっていたので、木が高く売れた。その時までは、共有林にはあまり木が植わっていなかったが、この時代に開墾して木を植えた。木が高く売れる時代がずっと続くと思っていたから、山の上の方まで杉を植林した。ああいうところに植えた木は、今では伐採して集材するのも難しい。

○ その頃は共有林の木を入札したら 10 数人やってきた。加世田の製材所から入札に来ている人が多かった。東製材というところが共有林の木をよく買ってくれた。1 町くらいの山を 100 万円くらいで買っていった。今では考えられないくらい高い価格だ。山の木を売って出た利益は、集落には少しだけ残して、後はみんなに 3，4 万円ずつ配当した。みんな、それで台所改善をした。その頃までのカマドと言ったら、粘土で作った粗末なものだったか、3，4 万円あったらそれがきれいになったのでみんな喜んだ。だから、山の整備とか、集落の共同作業には誰も文句を言わないで喜んでやった。そういうことが 3，4 年続いた。

○ 大浦に戻ってきて青年団長もやった。集落の人は大抵のことには協力的だったが、一つだけ大反対をくらったことがある。青年団長をしていた時に、「これからは男女平等の時代だ」と言い出して、「女の人も女子青年団」を作りなさい」と言ったのだが、これで先輩の人と大喧嘩になった。「お前はおなごんし（女の人）と遊ぼうと思ってそげんすっとやろが（そんなにするのだろうが）」と言われたが、「これからの時代は、これまでと同じようにしてはダメだ」と言って激論し、半年くらい議論した。結局、先輩方が負けて、女子青年団はできなかったが青年団に女性も加入することになった。

○ 昭和 25 年か 26 年頃、今度は区長をやらされた。区長は中堅がやることになってい

た。その頃、精造あんさん（※後に大浦村の村長となった窪 精造）が鹿児島から帰ってきた。精造あんさんは、その時既に経済連の部長かなんかしていたと思う。それで大浦では農協の参事になって、自分は随分精造あんさんから教育を受けた。成男さん（窪 精造の弟）より、いつも先に使われて、とてもかわいがってもらった。それで大分勉強になった。

アメリカへ農業の勉強に行く

○ 昭和 30 年、それまで区長やらなんやらしながら細々と農業をしていたけど、これじゃいけないと思って、派米の募集があって応募した。35 人くらい選ぶのに、600 人以上応募者がいたはずだ。その前に狩集多喜造（同じ集落の同世代）もその事業でアメリカに行っていた。派米の事業の始めの頃で、多喜造が最初、その次が自分たちだった。

○ 選考は体力検査から始まって、50kg の米俵が担げない人は落とされた。選考の他に、口うるさい人などは「共産党だ」と言われて落とされた。実際に、下村ツヨシさんは、選考には合格して渡米の準備をしていたのに、共産党だと言われて落とされた。もちろん、実際には共産党でもなんでもなかった。自分は、そういう時はちゃんとうるさいことはいわなかった。

○ 多喜造は北カリフォルニアに行った。あっちは果樹園で、そんな大変な作業はなかったようだ。自分は中部カリフォルニアで、野菜農家だった。渡米の時は、今にも墜落しそうなボロのプロペラ機で、給油のためにハワイとギニアを経由して、サンフランシスコまで 24 時間かかった。

○ 敗戦してから、アメリカは日本人に対して半奴隷みたいな感じで接していたので、死ぬ思いで働かされた。例えば、農園に着いたその日に、まだ作業着も作業靴もないのに仕事をさせられた。作業着とか作業靴は、アメリカで買えば安いと聞かされていたから、着いてから買えばいいと思っていたのだ。だから農園主に文句を言ったけど、「それが何か」といって働かされた。その日は大した仕事ではなかったが、後で、急いで作業服を買いに行った。

○ アメリカに行った最初の頃は本当に仕事がきつくて、帰りのバスに乗ろうとしても余りにも疲れすぎて足が上がらないというような人も出るくらいだった。それくらい辛い仕事もあった。

○ きつい仕事といえばシーニング（thinning）。つまり間引き。向こうの畑は 1500m くらいの直線の畝がある。それを延々と間引いていくわけだが、屈んでの作業だから 1 時間くらいすれば腰が痛くなる。それを 1 日やるわけだからもう腰が立たない。四

つん這いになってゴソゴソと仕事していると、望遠鏡で監督が見ていてしっかりしろと怒られる。半年くらいの間は、「こんな所にないごて来てしもたたろかい（なんで来てしまったのだろうか)」と思っていた。向こうの畑は見渡す限り広がっていて山などないから、太陽が地平線に沈んでいくのが見える。その沈んでいく太陽を見ながら、「田舎は今頃昼かなあ」なんて懐かしく思っていた。

○ シーニングについて、監督が一人一日 1 エーカーしろ、というもんだから、「1 エーカーもできるわけがない。無理を言うな」と反発した。1 エーカーというと大体 4 反。そしたら、農園ではメキシカンの人がたくさん働いていたが、監督がメキシカンの人を連れてきた。その人たちは要領よくパッパと欠いていくので 1 エーカーを平気でこなしてしまう。でも 3，4 ヶ月シーニングをしていたら、さすがに慣れてきてできるようになったし、腰を曲げての作業もさほど痛くはなくなった。

○ 自分たちは労働者キャンプで生活していたが、そこには 1 万 2000 人のメキシカンがいて、その中で日本人が 56 人しかいない。当然料理はメキシカンのうまくないのを食わされる。それで半年くらいしたら栄養失調者が出た。羊の爪がそのまま煮ていたりしていたので、自分は貧乏をしていたから大丈夫だったけど育ちのよい人なんか食べることができないからだ。

○ その時、自分が日本人労働者の中で一番年上だったこともあってリーダーをさせられていた。だからリーダーとしていろいろな交渉事をさせられた。それで、交渉事に時間を取られて仕事ができない。給料は時間給だから賃金が他の人の 3 分の 1 くらいしかもらえていなかった。何しろ、移民局がサンフランシスコにあって、農場から 5 時間くらいかかっていた。栄養失調者が出たことで、英語はしゃべれなかったので移民局でなくて日本の領事館に行って「このままではみんなダメになってしまうから、キャンプに日本食ができるコックを入れてもらうか、職場を変えて欲しい」と訴え出た。そこの領事館の副領事に大分出身の牧さんという人がいて、その人が同じ九州人ということで力になってくれ、半年したら別の農場に移れるということになった。

○ しかし、元の農場はサリナスにあったのだが、「サリナスのあいつらは、ストライキをして農場を変えさせるなんて日本の恥だ」などと新聞に書かれてしまい、移民局も責任者の 10 人は責任をとって日本に帰れと言ってきた。その 10 人に入っていたので、期限を満たさずに日本に帰らされることになってしまった。

○ 当時、アメリカ政府と日本政府の間で、年間何人をアメリカに派遣する、という取り決めになっていた。日本での賃金が大体 200 円から 300 円という時代に、アメリカなら一日の賃金が 2700 円だった。1 ドル 360 円の時代だったから、みんなアメリカで働きたがった。それで自分も途中で帰るのはイヤだった。そうしたら、例の副領

事が「あいつがおらんかったらキャンプがダメになる」と移民局と交渉してくれて、10 人のうち一人だけ帰らなくてもいいことになり、別の農場に移れることになった。残りの 9 人は全員日本に帰らされた。

2 番目の農場での活躍

○ 次の農場では、サリナスでの一件が知られていたから、「お前たちは trouble boy だから 1 年しか契約しない」と言われた。そこの農場には、北九州から来ていた人が 40 人くらい既に働いていたが、農場主は自分たちを一緒にするとトラブルがあるかもしれないから一緒には寝泊まりさせない、といって農家を 1 軒買ってきて、そこに入らされた。でも逆にそれがよくて、先に入っていた 40 人は狭いところにいくつもベッドを置いて窮屈に過ごしていたのに、自分たちは民家だから一人一部屋くらいあって悠々としていた。

○ そこのボスはチカザワさんという日本人だったが、この人はろくな人じゃないと思った。自分たちは問題を起こしてここに来ているということがあって、前から来ている人たちがきつくて嫌っていた大変な仕事ばかりさせられた。それでみんなすっかりめげていたが、自分はみんなに「キバレ（頑張れ）、いつかチャンスがくるはずだから」と言い聞かせていた。

○ 果たして、2 ヶ月くらいしてそのチャンスがやってきた。ボスがシーニングの仕事を言ってきた。シーニングなら、前の農場で鍛えられていたから前から来ている人たちに絶対に負けない。みんなに「よし、前の人より 2，3 倍やってやろう」と言って張り切った。そうしたら、前の人はさほど農作業のトレーニングを受けていなかったので、実際は 3，4 倍もシーニングをすることができた。

○ そうしたらボスの見る目が変わって、「窪さん、野菜の収穫は知ってるか」と聞いてきたので、「もちろん！」と答えて、それからは野菜の収穫とか、楽な仕事ばかりが回ってきた。それで今度は前からいる人たちに妬まれて大変だったが、4 ヶ月くらいしたらその人たちの滞在の期限が切れて日本に帰っていき、新しい人たちが入ってきた。今度は東北の人たちだった。

○ 自分は労働者のリーダーをさせられることになって、後輩に指導をする立場になったこともあって仕事は楽になった。滞在の期限が切れて日本に帰るというとき、今度はボスが「あと 3 年いてくれ」と泣きついてきた。アメリカ政府と日本政府の取り決めに基づいてきているので、「それは無理やっど」と言ったが「でもお前等がいないと農園がつぶれる」と言って聞かない。それで「じゃあ移民局に行って交渉してください。ダメでしょうけどね」と答えたら実際にボスは移民局と交渉して、3 ヶ月だ

け滞在期間が延びた。その時、ボスが「延ばしてもらったぞー！」と報告してきた嬉しそうな声を覚えている。

○ 延ばしてもらった 3 ヶ月間は、野菜を詰める作業をやった。野菜を詰めるような細かい仕事はアメリカ人はあまり得意ではなくて、力任せに詰めるようなところがあるから、大分その人たちよりもうまく仕事ができた。それで今度は市民権を持っている連中と同じ賃金がもらえたから、おかげで日本に戻るお金を稼げた。

○ アメリカに行っている間、年齢が一番高かったこともあって同じく派遣されていた連中から「オヤジオヤジ」と呼ばれて慕われた。キャンプには洗濯をやってくれるやつがいたり、いつもコーヒーを出してくれるやつもいた。だから自分では洗濯をしなくてよかったり、すぐにコーヒーが飲めたりした。

○ 滞在中に暇を見て、養鶏場や酪農家、野菜農家といろいろなところを見て回った。その頃は英語も単語くらいはわかるようになっていたし、向こうの人は手シナ（手振り）が上手だった。それでいろいろ見て回った結果、酪農をしたいと思うようになった。酪農をしたいと思ったのは、牛は放牧されていて草をやる必要もないし、夕方に「集まれー」といって小屋に農耕飼料を準備すると牛が勝手に集まってきてワクの中に入って、飼料を食べている間に搾乳するという具合で随分楽だと思ったからだ。逆に野菜農家は一番きついと思った。養鶏は、やっている人から「養鶏は 1 セントの計算ができないとできない」と言われた。緻密な商売だということだった。それで、酪農をしようと思って日本に帰ってきた。

大浦で酪農に挑戦するが挫折、干拓へ入植

○ 実際に大浦で酪農を始めたが、アメリカの酪農とは全然違う。まず放牧地がない。だから毎日草を集めるために田んぼの土手の草を鎌で刈って、それを大きなかごに入れて川まで運んで洗って、それから牛に食べさせる生活が続いた。家内には「これは酪農（楽のう）じゃない、苦悩（苦のう）じゃ」と言われた。4 頭の牛を飼っていたが、自分としても、こんなやり方じゃ大きくもできんわい、と思った。

○ その頃の大浦では、大坪栄一郎といって、派米青年として国から推されてアメリカに行った人がいた。この人が米国から乳牛を 5 頭入れて大浦で酪農を広めようと活動していたけど、これも何年も続かなかったと思う。

○ というわけで、こんな酪農をしていたらダメだということで放牧地を探し始めた。鹿児島県に牧場に適した土地がないか探し回った。まず鹿屋の牧之原に荒れていた土地があったので聞いてみたら、牧場に使える土地はあったけれども地価が高くて断念した。栗野とかえびのにまで行ってみたが、どこでもハネられた。ヨソ者扱いされて

まともに相手をしてくれなかったのだ。

○ その頃、県庁には開拓課というのがあって、戦争からの引き揚げ者に開墾する土地なんかを斡旋していた。そこに行って、50 町歩くらいの牧場が欲しい、と言ったが、スケールが大きすぎてやはり相手にされない。それでも 3, 4 回県庁に通っていると、甑島に 50 町歩の土地があると言われた。さすがに「もうちょっとよかところがいい」といって断ろうとしていたとき、開拓組合長というのがそこに通りかかって、大口の熊本県との県境のあたりに、開拓者が放棄した 29 町歩の土地があるという話をしてくれた。50 町歩には満たなかったけれど、しょうがないからそこにしようと思ってそこに行くことに決めた。

○ 県からは、個人ではなくて 5 人のグループで入植しろと言われたので、アメリカに行った仲間に声を掛けたり、あとは大根占の錦江町から申し込みがあって 3 人仲間に入れたりした。人はそれで集まったが、今度は金の問題になった。お金も持っていなかったから、県庁の金融課に友達がいたので相談し、結局県から 2000 万円借りられることになった。

○ そうして入植の準備が全部整ったところで、家内が「行かん」と言い出した。もう子どももいたし、そんな遠いところには行きたくなかったのだ。それまでも入植の話はしていたが、詳しくはしていなかった。最後の最後になって、頑として譲らなかった。それで、牧場は諦めた。

○ ちょうどその頃、干拓の第 2 工区の配分問題があった。第 2 工区は土地が悪くて、排水に問題があったので入植希望者が少なかった。それで県の方では、客土をするなど土壌の改善をしていた。牧場の件がダメになったとき、相談していた開拓課が、「大浦干拓があるじゃないか」といってきた。干拓に入植すれば 5 町歩くれるという話があって、それで申請した。土地の配分を担当する係長が「窪さんは大口に行くんでしょうが。干拓に土地はいらないでしょう？」なんていう皮肉を言ってきて、「どしこ（どれくらい）欲しいのか」と聞くので、急に申し込んだ手前 3 町歩が限度だろうと思って「3 町歩」と答えた。それで 3 町歩で干拓の米作りが始まった。

○ 干拓は、最初は塩が残っていたからとても米が作れるようなところではなかった。1 年目は水の取水口付近だけの 2 反くらいだけ米を作った。そしたら、意外なことに中身が詰まっていい米が穫れた。そして 2 年目には米が作れるようになった。

○ でも機械が耕耘機しかない。耕耘機では、1 日の作業量は 5，6 反がせいぜいでしかも重労働だ。それで、従兄弟と共同で小さなトラクターを購入した。トラクターで田んぼをうちながら、30 日から 40 日くらいかかって田植えをした。

【補記】

ここに筆記した話は、2014 年 1 月 4 日に窪 俊夫さん宅において、奥様同席の下で約 4 時間にわたって聞かせてもらったものである。原本となる筆記記録については、事実関係の間違いがないかなど俊夫さんに確認してもらった。また、公表についても差し支えない旨確認を取った（そのため、公表にそぐわない内容については削除した）。

本稿は、その原本を元に、読者の便宜のため適宜小見出しをつけ、理解を助けるための若干の補注をしたものである。なお俊夫さんは、同姓であるが私の親戚ではない。

2015 年 1 月 24 日、俊夫さんは不慮の事故で亡くなった。満 91 歳だった。この話の続きを聞かせてもらう約束をしていた折の事故であった。それで、この聞き書きによる自分史は、俊夫さんの人生の約 1/3 しかカバーすることができなかったし、とても中途半端なところで唐突に打ち切られることになった。忙しさにかまけて俊夫さん宅に伺う機会を作れず、結局この後の話が聞けなくなってしまったのは残念でならない。

俊夫さんはこの話で語られている厳しい時代の後、干拓での米作りの他、養鶏業にも取り組まれた。また農業の傍ら、教育委員長や森林組合長といった要職を歴任された。特に森林組合においては、川辺森林組合、南薩森林組合を経て「かごしま森林組合」の初代組合長として優れた経営の手腕を発揮された。そうした功績により、2002 年には勲五等瑞宝章を受章されている。そういった活躍の時代の詳しい話を伺えなかったことは、重ねて残念であり、後悔の念に堪えない。

2015 年 1 月 26 日　窪　壮一朗（聞き手・筆記）